

特別活動によるカリキュラムマネジメントの実践報告

—中学校の学校行事（学校ガイダンス、体育祭）の試みについて—

黒水 るみこ¹⁾ 中川 英貴²⁾

A Study of the Curriculum Management of Special Activities: Trial of School Events in Junior High School

Rumiko Kuromizu¹⁾ Hideki Nakagawa²⁾
(2013年11月27日受理)

I. はじめに

近年、学校段階の接続の問題として、小1プロブレム、中1ギャップなど集団への適応に関わる問題が指摘されており、特別活動の課題の一つである（平成20年中央教育審議会答申）と示されている。文部科学省は、平成20年3月小・中学校の学習指導要領を改訂した。実施スケジュールは、小学校は平成23年4月から、中学校は平成24年4月から実施されている。新学習指導要領の特別活動の学校行事の目標として、「学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」と制定されている（文部科学省、2008）。特別活動のねらいは、児童・生徒が所属している学級や委員会、部活動などの一員としての自覚を高めることもあり、特に学校行事や児童会・生徒会行事などの活動を通して成就感を共有することが重要な要因としている。しかしながら、特別活動は学校行事が各自自治体によって様々であることから、教科書やカリキュラムが存在せず、各学校でカリキュラムマネジメントが探索的に実施されている状況である。田村（2011）によると、「カリキュラムマネジメントとは、各学校が学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、問題解決の営みである」と述べている。どのようなカリキュラムを実施するかによって、教師は子どもたちの変化を目的の当りすることで、学校組織としての機能が活性化されることが示唆されている。このようなことから、カリキュラムマネジメントを意識した取り組みが各

学校で広がっている。本研究では、福岡市のA中学校の特別活動によるカリキュラムマネジメントの実践的な取り組みを報告していきたい。

II. 問題の所在と目的

福岡市のA中学校では、中1ギャップの解消を目標とした、入学前後に2つの特別活動のカリキュラムマネジメントを実施されている。特別活動の1つ目は入学前2月に学校ガイダンス（本研究の小中連携の特別活動を「学校ガイダンス」と命名する）を行い、2つ目は入学後5月に体育祭を実施されている。A中学校では、この2つの特別活動を通して、学校生活に適応し、自主的・実践的な活動や集団・社会の一員として協力する体験活動の実践を目指している。しかし、A中学校の特別活動の課題として、学校行事の体験活動は、生徒にどのような達成感や自己成長を得ているのか、また学校側は生徒の実態を把握しているのか、数量的なデータとしてこれまで明らかにしていなかった点があった。先行研究では、小中連携の学校ガイダンスや校内研修など様々な研究がされてきている（倉本、2005；森光、2004；田村、2011）。特別活動のカリキュラムマネジメントの効果としては、倉本（2005）は「特別活動のカリキュラムマネジメントは体育祭実践と学校改善とは緊密な関係を持つことが実証されている」と述べている。しかし、入学前後の特別活動のカリキュラムマネジメントを実施している先行研究は少なく、統計的なデータ分析まで視野にいれた研究は筆者が概観するかぎり見当たらない。

以上のことから、本研究ではA中学校の特別活動の学校行事（学校ガイダンス・体育祭）によるカリ

キュラムマネジメントの実践報告を行い、アンケート調査から生徒の実態について検討していくことを目的とする。

Ⅲ. A中学校のカリキュラムマネジメントの概要

A中学校は、福岡市西側に位置する中規模校であり、周辺は穏やかな住宅地が密集している地域である。A中学校の中核となる校務分掌別担当者会は、週時程に位置づけており、週時程の時間の確保からカリキュラムマネジメントの準備をされていた。各委員会（生徒指導委員会、研修委員会、人権教育委員会、総合的な学習の時間の係会、生徒会係会など）は、管理職や教務主任・学年主任（ミドルリーダー）がメンバーであり、具体的なカリキュラムを開発し、検討・改善していく場とされていた。

筆者（中川）は、A中学校の学校長として勤務していた頃、特別活動のカリキュラムマネジメント開発に携わっており、そのA中学校におけるカリキュラム開発の日常化組織モデル試案を図1に示す。この図1は、前年度の反省から生徒の実態把握をリサーチ（R）し、計画（P）を立てている。その後、学校行事が実施（D）されて、評価（C）と改善（A）から、学校改善の課題を明確化されている。このようなRPDCAの流れは、常にサイクルされており、学校の目標がカリキュラムに反映できるよう編制されている。

A中学校のカリキュラムマネジメントは学校長のリーダーシップが大きく影響されている。リーダーシップの種類について、勝野（2011）は、①積極的な学校文化を構築していく「変革的リーダーシップ」、②多くの組織構成員の着想を生かしていく「分散型リーダーシップ」、③教師の教育活動に直接的に関与していく「教授型リーダーシップ」であると述べている。A中学校のカリキュラムマネジメントでは、これらの3つのリーダーシップが活動に応じて臨機応変に実施されていた。A学校のカリキュラムマネジメントサイクルは、①1年単位のロングスパン型（研修テーマに沿った校内研究、教科等の基底教育計画（年間のカリキュラム）など）、②学校行事や総合的な学習の時間、特別活動などのトピック学習やテーマ学習などのショートプラン型として実施されている。①では、カリキュラム委員会などを設置して年度の終わりに次年度の教育計画を作成されている。ここでは主としてミドルリーダー（教務主任や研究主任など）が中心となり、毎月の研修会、教科部会などによりカリキュラムを実

施し評価されている。②では、年間カリキュラムに沿うものの、行事や活動の前に担当分掌等の教員がタスクチームとして企画立案されている。その成果は、学級だよりや学年・学校だよりで家庭や地域へ情報発信されていた。

以上のことを踏まえ、図1を基盤としたA中学校の特別活動のカリキュラムマネジメントの具体的な取り組みの紹介とアンケート調査を検討していきたい。

Ⅳ. カリキュラムマネジメントの取り組み

1. 入学前学校ガイダンスにおけるカリキュラム編成と具体的プログラム（調査①）

平成21年度から福岡市の全小中学校では、小中連携のスムーズな接続を意識し、9カ年を見通した学習指導、生徒指導を実施されていた。福岡市のA中学校では、中1ギャップを解消するために、児童が入学前の小学6年時（2月）のうちに、中学校へ出向く特別活動の学校ガイダンスを実施されている。

(1) 入学前学校ガイダンスのカリキュラム編成

A中学校では、入学前学校ガイダンスのカリキュラム編成において、前年度の成果と課題の検討を行い、今年度のカリキュラム編成のため打ち合わせを管理職・ミドルリーダー（教務主任や研究主任など）を中心に実施されている。生徒会係会のカリキュラム開発の視点として、①生徒会役員からの学校説明や校訓の意味を通して中学校への親しみやすさを演出する、②生徒による学校説明、施設案内、部活動見学などを行う、③新しい教科（英語等）に関心を高めるため、NS（ネイティブスピーカー）と生徒の掛け合いを演出する、④中学校のシステム（教科担任制、生徒会活動等）を紹介する、⑤両小学校の出会いの場を演出するとしてお互いの小学校紹介を行う等とされている。

(2) 具体的展開（プログラム）

(1)を基にカリキュラムを企画・編制されている。具体的な展開（プログラム）は、①学校長の挨拶、②吹奏楽部の歓迎演奏・校歌紹介・生徒会役員による学校生活の説明（1日の中学校生活、校訓の説明など）、③NS（ネイティブスピーカー）と生徒の簡単な英会話の紹介、④両小学校の対面（各小学校代表による学校説明）、⑤授業見学及び校舎内の施設見学、⑥部活動見学とされている。A中学校の学校ガイダンスは、生徒会が主催であり、生徒が自発的

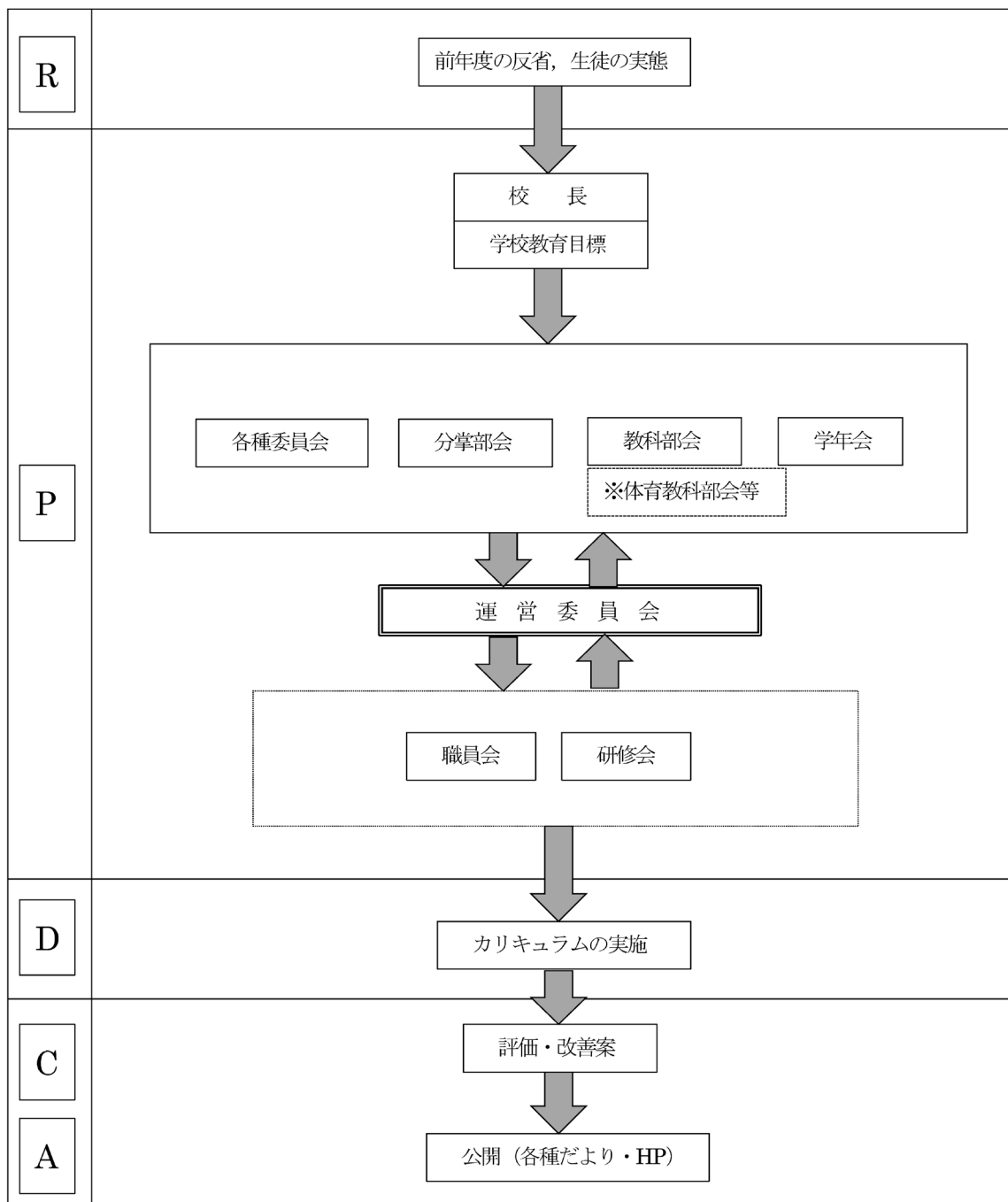


図1 中学校におけるカリキュラム開発の日常化組織モデル試案

に活動できるよう教員はサポート体制で臨んでいた。以上のようなカリキュラム編成で取り組み、小学生は実際に中学校に対する不安感の解消、進学への期待感や安心感をもつことをねらいとされた。中学生は新入生を受け入れる側として親しみやすさや先輩としての自覚をもつことで、学校改善・学習効果からお互いの成長につながることをねらいとされた。

2. 入学直後におけるカリキュラム編成と具体的プログラム（調査②）

福岡市の多くの中学校では、新入生入学後の5月下旬～6月初旬に体育祭を実施されている。福岡市の中学校では、年度当初に実施されることで、1年生は中学生としての自覚を持ち、体育祭という学校行事に参加し集団への意識を高め、その一員としてやり遂げた達成感をもつことが望まれている。A中学校の1年生は入学前に小中連携の学校ガイダンスを実施しており、次のステップアップとして体育祭を通して中学生の自覚を持ち、更に自己成長する場として設定された。

(1) 中学生としての自覚をもつカリキュラム編成

A中学校の体育祭では、異学年集団（赤、青、黄のブロック）によるブロック演技（集団の美を競うマ스ゲーム中心）を実施されている。学校の体育祭は生徒会を中心に生徒主体で開催しており、ブロック演技の企画委員をオーディションで選出し、演技プログラムづくりから作成されている。また、体育祭運営の中心となる企画委員から各ブロック縦割りの指導を行うカリキュラム編成とされた。

(2) 生徒主体の大会準備の具体的な活動

A中学校の基本的な大会準備の活動は、①学級旗の作成、②ブロックパネルの作成、③オーディション形式によるブロック応援リーダーの選出、④生徒会による大会スローガンの決定等とされた。特に、③オーディション形式によるブロック応援リーダーの選出は、学年の教員が審査員になって、応援リーダーとして適任かどうかを審査される。このような過程を経て意欲ある生徒が選出され、リーダーシップを発揮し生徒主体の活動が円滑に展開されている。体育祭運営の過程を通して、縦割りの指導から先輩・後輩のつながりと学年競技から学級のまとまりも形成していくことが期待される。1年生にとっては入学後の5月初旬から体育祭の練習が実施されている。カリキュラムは1年生が3年生の先輩の姿を真近に接することで、理想の自己像・中学生像を

イメージし、「自分もそうなりたい」という育ちにつながる好機であると期待し編成されている。

3. 検証のための調査

(1) 入学前学校ガイダンスにおけるカリキュラム編成と具体的プログラム（調査①）

①調査概要

調査時期：200X年3月

調査対象：小学6年生289人を対象に質問紙を配布・回収した。

質問項目：10項目、4件法（4：よくあてはまる、3：ややあてはまる、2：ややあてはまらない、1：全くあてはまらない）による単一回答方式とした。また、自由記述の欄を設定し、各自で記述した。

②結果と考察

質問項目に対して、小学6年生289人のデータについて因子分析を実施した。因子分析の抽出方法は主因子法を用いた。因子数はスクリープロットの変化と解釈のしやすさから2と決定した。回転はプロマックス回転を用いた。因子負荷量が0.3に満たない項目を削除しながら分析を行った。分析の結果を表1に示す。第1因子には、項目Q2, 5, 6, 8が高い負荷を示した。それらの項目は、中学生としての自覚や中学校生活に向けて期待を示しているため、「期待感因子」と命名した。第1因子の信頼性は、 $\alpha = .704$ であり信頼性に問題はない。第2因子には、項目Q3, 4, 7, 9, 10が高い負荷を示した。これらは実際に中学校に行ってみることで不安が減り、安心につながる要素を示していたため、「安心感因子」と命名した。信頼性係数は、 $\alpha = .689$ であり問題はなかった。削除した項目は「Q1. 体験入学に参加してよかった」であった。抽出された2つの因子の項目を列挙すると、第1因子「期待感因子」、第2因子「安心感因子」となる。これらの尺度はカリキュラム編成時の具体的展開（プログラム）により、小学生は中学校に対する不安感の解消に影響を与えたのではないかと推測される。学校ガイダンスの実施により、入学前の生徒の実態を把握し、入学後のカリキュラムマネジメントを具体的に検討する方向性が見えてくるのではないかと考えられる。

調査①では自由記述の欄を設けており、代表的な記述は以下の通りである。

①今まで中学校は、いろいろな不安がありましたが、話を聞いて学校を回ったり、部活動の内容を見たりして、中学校に行くのが楽しみになりました。

- ②中学校がどんなところか分からなくて色々な心配だったけれど、だいたいの様子がわかって少し安心しました。
- ③中学校は先ばいがきびしいのかな、と聞いていたけれど、すこし安心しました。
- ④中学校に入学することが不安だったけど、部活をしている先ばいたちがとても楽しそうにしていたので、自分もこんなふう楽しくやれそうだなと思って前より不安が減りました。

小学生にとって、中学校に入学することは大きな出来事の一つである。自由記述から中学校への不安感が伺えていたが、学校ガイダンスを実施したことで中学校への見通しができ、期待感や安心感を持つことができたのではないかと考えられる。また、実際に中学校に行ってみることで中学校入学の準備や心構えに備えることができたこと示唆される。しかし、集団の適応や学習、人間関係など不安要素は残っており、中学校側はその点を踏まえ、受け入れる体制を考慮しカリキュラム編成を実施していかなくてはならない。このように、新しい環境への不安感の軽減や入学に向けて準備ができる小中連携の学校ガイダンスは、適応の視点から見ると効果的な行事、学校適応へつながると推測される。

(2) 入学直後におけるカリキュラム編成と具体的プログラム（調査②）

①調査概要

調査時期：200X年5月

調査対象：体育祭実施後、中学校1年生135人を対象に質問紙を配布・回収した。

（注）A中学校の1年生は、小学校6年生から中学校1年生までの接続期に調査したため、同一である。

質問項目：15項目、4件法（4：よくあてはまる、3：ややあてはまる、2：ややあてはまらない、1：全くあてはまらない）による単一回答方式とした。

②結果と考察

質問項目に対して、中学校1年生135人のデータについて因子分析を実施した。因子分析の抽出方法は最尤法を用いた。因子数はスクリープロットの変化と解釈のしやすさから3と決定した。回転はプロマックス回転を用いた。因子負荷量が0.3に満たない項目を削除しながら分析を行った。分析の結果を表2に示す。第1因子には、項目Q6, 14, 15が高い負荷を示した。それらの項目は、中学生としての自覚や中学校生活に関わることを示しているため、「自覚意識因子」と命名した。第1因子の信頼性は、 $\alpha = .762$ であり信頼性に問題はない。第2因子には、項目Q7, 8, 9が高い負荷を示した。これらは自分自身の自己成長に関わることを示しているため、「自己成長因子」と命名した。信頼性係数

表1 小6学生を対象としたカリキュラムマネジメント後の因子分析結果（主因子法・promax回転後）

	F 1	F 2
第1因子 ($\alpha = .704$)		
6. 中学校入学に向けてこれからの小学校生活を充実させたい	.708	
2. 中学校で勉強にがんばろうと思う	.689	
5. 中学校でたくさんの友達をつくりたい	.658	
8. 中学校で部活動がんばろうと思う	.614	
第2因子 ($\alpha = .689$)		
3. 中学校に行くと安心した		.696
4. 中学校に行くのが楽しみになった		.672
9. 中学生になるという実感がわいた		.648
10. 中学校のようすがわかった		.648
7. 中学生（先ばい）が親切だった		.590
	因子間相関	F1 F2
	F 2	.472

(1)削除された項目は以下の通りである。

- 1. 体験入学に参加してよかった

は、 $\alpha = .753$ であり問題はなかった。第3因子は項目、Q 2, 10, 11, 12が高い負荷を示した。これらは団結力や集団力に関することを示していたため、「集団意識因子」と命名した。信頼係数は、 $\alpha = .709$ であり問題はなかった。削除した項目は「Q 1. 中学校の体育祭は小学校に比べて迫力があつた」、「Q 3. 自分も3年生になったら先輩達のように体育祭をリードしたい」「Q 4. 一生懸命やつという達成感を感じた」「Q 5. 体育会に参加した」「Q 13. 自分が成長したと感じた」であった。抽出された3つの因子の項目を列挙すると、第1因子「自覚意識因子」、第2因子「自己成長因子」、第3因子「集団意識因子」となる。これは、学習指導要領の学校行事の目標である「望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」(文部科学省, 2008)にほぼ沿っており、特別活動の集団性・自発性を学校・社会との関係性において育成を図ることも関連している。体育祭のカリキュラムマネジメントを実施したことにより、いままで漠然としていた体育祭の感想から生徒の体験活動が見えてきた。今後はこの体験から生徒の自己評価と課題克服へとつなげていくことが望まれる。

V. まとめと今後の課題

本研究の特別活動のカリキュラムマネジメントについて、中1ギャップの解消を目指した入学前後の2つの体験活動を論じてきた。「生徒につけたい力」を目標にカリキュラムを実施し、自己評価の低い生徒に対して、教員は重点的に指導を行う目安となった。そのことは、生徒の実態を把握することで「目指す生徒の姿」をもとに教員は指導を行い、今後の目標達成の手立てになると考えられる。特別活動の学校行事について、中川(2010)は「特に1年生にとって、中学校という集団への所属感や級友、上級生との連帯感を体得させることが肝心であり、このためには共通の体験活動から、感動体験を味わわせることが必要となる」と述べている。本研究でも特別活動を通して、同様の体験を経験し中学生としての所属感や連帯感を感じたのではないかと考えられる。森光(2004)は「特別活動と総合的な学習の時間のカリキュラムマネジメントの関連」の指摘をしており、本研究の調査①においても、特別活動と総合的な学習の時間のすり合わせを行い、実施の前後に生徒の興味・関心に基づいて自主的に学ばせるカリキュラム開発も今後は必要であると考えられる。調査②では、生徒自身が自主的に学び創る過程

表2 中学生と対象としたカリキュラムマネジメント後の因子分析結果(最尤法・promax回転後)

	F 1	F 2	F 3
第1因子 ($\alpha = .762$)			
15. 中学生として自覚が芽生えた	.847		
14. 学校行事は楽しい	.698		
6. 中学生になったと実感した	.654		
第2因子 ($\alpha = .753$)			
8. 自分自身の限界に挑戦できた		.789	
9. 自分に自信が持てた		.717	
7. ブロックで先輩や同級生と一体感を感じた		.660	
第3因子 ($\alpha = .709$)			
2. 先輩達が一生懸命取り組んでいる姿が素晴らしかった			.711
12. 友達との友情が深まった			.689
10. 学級の団結がはかれた			.548
11. ブロックの団結がはかれた			.537
	因子間相関	F 1	F 2
	F 2	.619	
	F 3	.516	.477

(1)削除された項目は以下の通りである。

1. 中学校の体育会は小学校に比べて迫力があつた 3. 自分も3年生になったら先輩達のように体育祭をリードしたい 4. 一生懸命やつたという達成感を感じた 5. 体育会に感動した 13. 自分が成長したと感じた

をカリキュラムマネジメントすることに教員はサポートする体制で実施していった。調査①②の検証から、中1ギャップの解消を目指した小中連携の学校ガイダンスから体育祭まで特別活動に焦点を置き、実施したことは生徒の実態を学校全体で把握することにつながったと考えられる。

今後の課題として、アンケート調査の統計的なデータ分析は因子分析のみであり、実証性を高めるためにも入学前後のプレポスト調査、データ数の増加や年次変化などが必要である。また、アンケート調査の内容を改訂し、対象を担任や教員、保護者へと幅を広げて調査を実施し、多軸評価により評価をしていきたい。今後の継続研究として、各学校の特別活動のカリキュラムマネジメントの多様性とその効果の可能性を検討していきたい。

引用文献

倉本哲男. (2005). 特別活動におけるカリキュラムマネジメントの研究～「運動会」を通じた「学校改善」・「学校づくり」の実践事例研究～. 教育経営学研究紀要, 第8号, 11-17.

黒水るみこ・中川英貴. (2013). 不登校対応に関する一考察—教員間チームによるステップルームの活用について. 中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要, 第45号, 195-200.

文部科学省. (2004). 学校組織マネジメント研修—これからの校長・教頭のために— (モデル・カリキュラム).

文部科学省. 中学校学習指導要領解説特別活動編. (2008).

<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/102690>

文部科学省. 中央教育審議会.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/

森光義昭. (2004). 特別活動のカリキュラムマネジメント. 九州共立大学経済学部紀要, 96, 57-72.

中川英貴. (2010). 「中1ギャップ」に関する一考察—発達課題としての学校行事を中心に—. 九州教育経営学会研究紀要, 第16号, 143-148.

勝野正章・小川正人. (2011). 教育行政と学校経営. 放送大学教育振興会.

田村知子. (2011). 実践カリキュラムマネジメント. ぎょうせい.

謝 辞

本研究の作成にあたりご協力いただきました, A中学校の先生方, 生徒のみなさまに厚くお礼申し上げます。